

# マスク着用が保育に及ぼす影響に関する保育者の認識

西館 有沙

## Recognition by the Caregiver on the Effect of Mask Wearing during Childcare

Nishidate Arisa

E-mail: nishiari@edu.u-toyama.ac.jp

### 概要

保育者の職務中のマスク着用は、感染症対策という面からみれば必要な対応であるが、子どもの健全な心身の発達を促す保育を行う際の影響の有無にも、留意する必要がある。そこで本研究では、保育者のマスク着用状況やマスク着用に関する認識を明らかにするため、保育者に対する質問紙調査を実施した。質問紙は107部を回収し、そこから看護師や障害児施設に勤務する保育士の回答を除いた90部を分析対象とした。保育者は自身が風邪等をひいている時(94%)や病気が流行している期間(70%)にはマスクを着用すべきであると考えており、そのような時にはマスクを着用していた。一方、6割を超える保育者がマスクの着用によって困った経験があるとした。その理由としては、声が届きにくいことや保育者の表情が子どもに伝わりにくいことが多く挙げられた。また、保育者はこれらによって保育に支障が生じると考える傾向にあった。

キーワード：乳幼児，保育，保育者，マスク着用

keywords：Young child, Childcare, Nursery teacher, Mask wearing

### I. はじめに

乳幼児は、免疫力が弱く、また病気にかかった場合に症状が重くなりやすい。そのため、乳幼児を預かる保育所等では、感染症対策に気を配らなくてはならない。厚生労働省(2012)が作成した「保育所における感染症対策ガイドライン」(以下、感染症対策ガイドライン)には、咳などの呼吸器症状がある職員はマスクの着用を心がけること、保育所内でインフルエンザ患者が発生している期間中は全員が勤務中にマスクの着用を心がけ、特に0-1歳児クラスの担当者は必ず着用することと記されている。

保育所において感染症対策が重要であることは言うまでもない。しかし、保育所は子どもの健康の保持にとどまらず、子どもの健全な心身の発達を図る場である。そのため、保育者がマスクで口元を覆うことが、乳幼児とのコミュニケーションや保育活動に及ぼす影響の有無や程度にも、留意すべきである。

医療分野においてはすでに、医療関係者のマスク着用が患者とのコミュニケーションに及ぼす影響に関する研究が複数取り組まれている(堀・佐々木・森脇, 2000; 森井・飛川・上田・吉森・海原・一

ノ山, 2013; 野村・富城・鈴木・吉岡・城戸・吉川, 2011; 野村・富城・竹本・城・鈴木・方岡・富田・池田・吉川, 2009; 佐々木・萩原, 2009; 田村・岸本・福島, 2013など)。たとえば、堀ら(2000)は、成人患者に対する調査より、看護師がマスクを着用した場合は堅いイメージを、マスクを着用しない場合は柔らかいイメージを患者に抱かせること、看護師と目を合わせる患者数はマスク着用により半減することを明らかにしている。一方で、看護師がマスクを着用していても、患者は看護師に対して暖かく清潔なイメージを抱くという報告(佐々木・萩原, 2009)もある。堀ら(2000)はICU勤務の看護師について、佐々木・萩原(2009)は手術室看護師について尋ねたものであったことから、対象者が看護師を毎日のケアをしてくれる存在としてみていたかどうかや、対象者のおかれていた状況によって、結果に違いが生じた可能性がある。

また、野村ら(2009)は、結核病棟の入院患者に対する調査より、患者は看護師がマスクをつけていたとしても、個人の区別のつきにくさや表情の読みにくさ、親しみにくさをそれほど強く感じているわけではないことを明らかにしている。さらに野村

ら（2011）は、マスク着用の有無が看護師の対応の好ましさを低下させるかについて実験的に検証し、マスクを着けていても看護師が心をこめていることが患者に伝わったことを明らかにしている。

このように、大人では、相手がマスクを着用していても目元や声、体型や動きの特徴などから、個人を識別したり、感情を読み取ったりすることが可能であると考えられる。そもそも、西洋人に比べて東洋人は、顔を見て相手の感情を読み取ろうとする時に、顔全体を均等に見るというより、目をよく見ることが確認されている（Jack, Blais, Scheepers, Schyns & Caldara, 2009）。そのため、マスクをした顔にそれほど強い違和感をもつことや、感情の読み取りにおいて困惑することが少ないのであろう。

一方、保育所において保育者がかかわる対象は、乳児や幼児である。ひとは、他者の表情や声音、しぐさなどの表出的な手がかりをもとにして、他者の感情を理解する力を身につけていく。乳児期や幼児期の子どもは、まさにその発達過程にある。また、保育所には知的障害や発達障害など、さまざまな特性のある子どもがいる。

保育所では、原則8時間の保育に加え、延長保育等を受ける子どもが増えている。つまり、子どもたちは一日の多くの時間を保育者と過ごしているのである。これらのことをふまえると、乳幼児の発達支援を行う上で、保育者のマスク着用が影響を及ぼすかどうかを検証しておく必要がある。

## II. 本研究の目的

保育所における保育者のマスク着用の状況を明らかにした文献や、マスク着用による影響を明らかにした文献は見あたらない。そこで本研究では、保育者のマスク着用に関する課題を整理するための基礎資料を得ることを目的とし、保育者は保育中にマスクを着用しているか、マスクの着用による保育上の問題を感じているかを調べた。マスク着用による保育上の問題については、保育者の声の聞こえやすさ、保育者の表情（感情）の伝わりやすさ、保育者が話す内容に関する子どもの理解度、未満児（0歳からその年度中に3歳になるまでの子ども）とのコミュニケーション、発達障害児とのコミュニケーションについて調べることにした。

## III. 方法

### (1) 調査対象者

X県内の保育士および保健師、看護師対象の講演会に参加した保育士を対象とした。回答済質問紙は107部を回収した（配布部数がわからないため回収率は不明）。このうち、看護師や障害児施設に勤務する保育士の回答を除き、保育所と認定こども園（計87園）に勤務する保育士90名分の回答を分析対象とした。保育士の勤務年数は、1年未満が5名、1～5年未満が21名、5～10年未満が17名、10年以上が46名であった（無回答1名）。

回答者が勤務するすべての園では未満児の保育を行っていたが、これまでに0歳児クラスの担当経験のない者が39名、1歳児クラスの担当経験のない者が25名、2歳児クラスの担当経験のない者が18名、いずれのクラスも担当した経験のない者が7名いた。

### (2) 手続き

2014年12月に講演会の会場内で調査協力を依頼し、その場で質問紙を配布し、会の終了後に出口において回収した。質問紙の配布時には、調査協力の有無は本人の自由意思に基づいて決めてよいこと、回答をしなくても不利益は被らないこと、回答を途中で中止してもよいこと、質問紙への回答と提出をもって調査協力への承諾を得られたものとするを伝えた。

### (3) 倫理的配慮

本調査は、富山大学人間発達科学部長に研究計画書および質問紙見本を提出し、2014年12月に学部長の承認を得て行った。

## IV. 結果

### (1) 保育中のマスク着用に関する園の方針

回答者が勤務している園において、マスク着用に関する方針がどのように定められているかを選択式で尋ねた。同一園に勤める保育者が3名いたため、園ごとに集計を行ったところ、75%（87園中65園）は「特に決まりはない」と答え、20%（17園）は「条件付きで着用することになっている」と答えた。一方、「原則として、保育中にマスクを着用しないことになっている」（3%）、「保育中にはマスクを常に着用することになっている」（1%）という園

は少数であった（1園は無回答）。

「条件付きでマスクを着用することになっている」園に勤務する保育士に対して、マスクを着用する条件とは何かを選択式で尋ねた。その結果、「保育者が、子どもにうつす可能性のある病気にかかっている時」が76%（17園中13園）、「冬期など、風邪やインフルエンザが流行しやすい時期」「子どもの間で感染する病気が流行っている時期」がいずれも59%（10園）であった。

一方、「原則として、保育中にマスクを着用しないことになっている」園（3園）はいずれも、保育者の声が届きにくいことや、保育者の表情（感情）が伝わりにくいことを理由に挙げた。

## (2) 保育中のマスク着用状況と保育者の考え

保育中のマスク着用についてどう思うかを選択式で尋ねたところ、「子どもに病気をうつさないように、保育者が風邪等をひいている時には着用すべき」という回答が最も多く（94%）、「子どもから病気をうつされないよう、実際に病気が流行している期間は着用すべき」（70%）、「子どもから病気をうつされないよう、冬期などの病気が流行しやすい時期は着用すべき」（53%）が次いだ（表1）。なお、表1に示した項目「0歳児の保育を担当する時は着用すべき」を選択した保育者は2名とも、0歳児クラスを担当した経験がなかった。また「1歳児の保育を担当する時は着用すべき」と答えた者は1名（1歳児の保育の担当経験あり）のみであった。つまり、0歳児や1歳児の保育を担当した経験のある保育者で、0-1歳児の保育をする際に常時マスクを着用すべきと考える者はほとんどいなかった。

表1の回答を、勤務年数5年未満（26名）と5年以上（63名）に分け、 $\chi^2$ 検定を用いて比較したところ、いずれの回答項目にも有意差は認められなかつた。

表1. マスク着用に関する保育者の考え  $N=90$

保育者が風邪等をひいている時には着用すべき	94% (85名)
実際に病気が流行している期間は着用すべき	70% (63名)
冬期などの病気が流行しやすい時期は着用すべき	53% (48名)
マスクは着用すべきではない	3% (3名)
0歳児の保育を担当する時は着用すべき	2% (2名)
その他	7% (6名)

た。つまり、保育士としての経験年数に関係なく、保育者は感染症対策としてマスクを着けるべきであると考えていることがわかる。

回答者が保育中にマスクを着用することがあるかを選択式で尋ねたところ、「自分が風邪等をひいている時に着用する」（93%）、「実際に病気が流行している期間に着用する」（69%）、「冬期などの病気が流行しやすい時期に着用する」（51%）という回答が多かった（表2）。

回答者の勤務する園に、保育中にマスクを着用している保育者がいるかを選択式で尋ねたところ、「常に着用している保育者がいる」（14%、90名中13名）、「時々着用している保育者がいる」（83%、75名）であり、「着用している保育者はいない」と答えた者は1名のみであった（2名は無回答）。

表2. 回答者の保育中のマスク着用状況  $N=90$

自分が風邪等をひいている時に着用する	93% (84名)
実際に病気が流行している期間に着用する	69% (62名)
冬期などの病気が流行しやすい時期に着用する	51% (46名)
花粉症の症状が出ている時に着用する	38% (34名)
化粧をしていない時に着用する	2% (2名)
保育中にマスクを着用することはない	1% (1名)
その他	4% (4名)

## (3) 保育中のマスク着用について保育者が困っていること

保育中にマスクを着用することのある保育者89名に対して、マスク着用において困ることがあるかを選択式で尋ねた。「よくある」と答えた者は11%（10名）、「時々ある」が54%（48名）、「ない」が29%（26名）であった（4名は無回答）。勤務年数5年未満と5年以上で回答に違いはあるかを $2 \times 3$ の $\chi^2$ 検定によって比較したところ、有意な差は認められなかった（ $\chi(2)=1.21, n.s.$ ）。勤務年数が長く、保育中のマスク着用慣れている保育者でも、困ることがあるとしていることから、保育技術によってカバーしにくい問題が生じている可能性がある。

マスク着用において困ったことがあると答えた58名に対して、その理由を選択式で尋ねた。その結果、「保育者の声が子どもに届きにくい」（88%）

表 3. 保育中のマスク着用において困った理由

	n=58
保育者の声が子どもに届きにくい	88% (51名)
保育者の表情(感情)が、子どもに伝わりにくい	79% (46名)
未満児が、保育者のマスク着用を嫌がる	9% (5名)
発達障害やその傾向のある子どもが、保育者のマスク着用を嫌がる	7% (4名)
子どもが、保育者のことを心配する	7% (4名)
子どもが保育者(自分)に慣れるのに時間がかかる	3% (2名)
その他	12% (7名)
無回答	3% (2名)

「保育者の表情(感情)が、子どもに伝わりにくい」(79%)といった回答が多かった(表3)。

保育者がマスクを着用することにより、保育のどのような点にどの程度の支障をきたすかを尋ねた。具体的には、「保育者の表情(感情)の伝わりやすさ」「保育者の声の聞こえやすさ」「発達障害やその傾向のある子どもとのコミュニケーション」「未満児とのコミュニケーション」「保育者が話す内容に関する子どもの理解度」の5項目を設け、それぞれに「全く思わない」から「とても思う」までの5段階評定で回答を求めた(図1)。図1より、どの項目も、平均値が線分の中央の値を上回った。この5項目について対応のある一要因分散分析および多重比較を行った。その結果、有意差が認められ( $F(4,89)=6.57, p<0.01$ ), Tukey法を用いた多重比較より、「保育者の表情(感情)の伝わりやすさ」と「保育者が話す内容に関する子どもの理解度」、「保育者の声の聞こえやすさ」と「保育者が話す内

容に関する子どもの理解度」の間に有意な差が認められた(前者は1%水準、後者は5%水準)。つまり、表情(感情)の伝わりやすさや声の聞こえやすさと比べると、話の内容の伝わりやすさについては、保育者が支障を感じていない傾向にあった。

## V. 考 察

多くの保育者が勤務年数に関係なく、自らが風邪等をひいている時や、病気が流行している期間にマスクを着用すべきであると考えており、そのような時にはマスクを着けていた。このような保育者の対応は、厚生労働省(2012)が感染症対策ガイドラインに示す内容と一致している。

一方で、回答者の勤務する園にマスクを常時着用している保育者がいると答えた者が1割強いた。感染症対策ガイドラインでは、常時の着用は求められていない。わが国では感染症対策や花粉症対策としてマスクを着用する市民が多い。最近では、衛生上の目的をもたない「伊達(だて)マスク」を着ける市民がいるという報告がある(廣瀬, 2014; 菊本, 2011)。森井ら(2013)は、看護師のマスク着用について、感染症対策以外に精神的な健康を維持する目的がある可能性や、マスクが被服化しているケースがある可能性を指摘している。保育者の中にも、これらの理由からマスクを常用している者がいることが考えられる。

保育者のマスク着用については、園の方針が定められていないと答えた保育者が多かった。対象園はいずれも感染症対策をとっているであろうが、マスクを着用するかどうかや、どのような時に着用するかは、保育者の自己判断に任せられているケースが多いことがうかがえる。

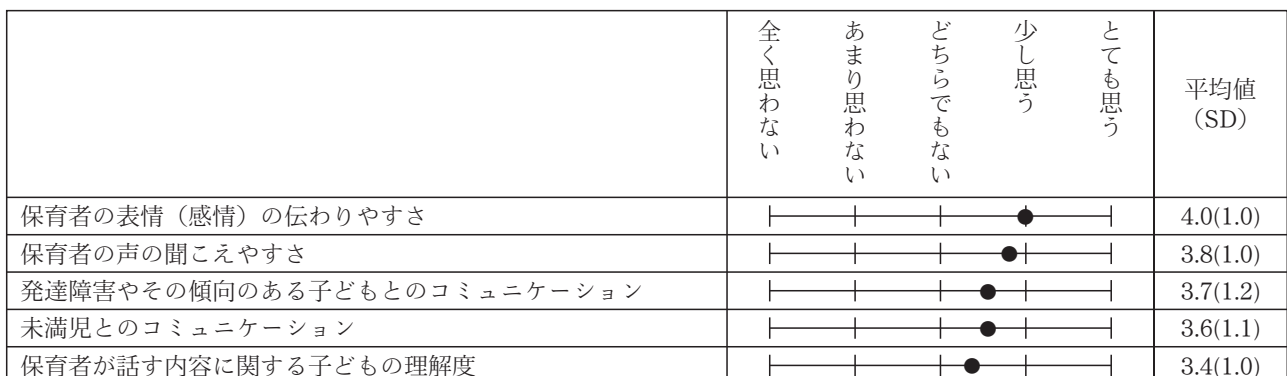


図 1. マスク着用により保育に支障をきたす事柄に関する保育者の認識 N=90

勤務年数に関係なく、6割を超える保育者がマスク着用によって困ったことがあると答えた。困った理由としては、子どもに声が届きにくいこと、保育者の表情（感情）が子どもに伝わりにくいことが多く挙げられた。マスクを着用している場合の声の届きにくさについて、北島・加悦・飯野（2012）は、マスクを着用していると高音域の音圧が低下し、高い声が聞き取りにくくなることを明らかにしている。保育者は乳幼児に対して高い声で話しかけることが多いが、マスクを着用した場合にはその声が、子どもにとって聞き取りにくいものとなっていると考えられる。

表情（感情）の読みについては、郷田・宮本（2000）が、顔の上半分を隠した場合と、下半分を隠した場合の感情判断の正答数を比較し、怒り・恐れ・驚き・悲しみは上部の効果が強く、嫌悪・幸福は下部の効果が強いと述べている。この結果が示すように、感情の種類によって、それが顔のどの部位に強く表れるかは異なるのであり、マスクで顔の一部が隠れることによって表情の読み取りがむずかしくなるケースはあると言える。これが乳幼児であればなおさら、表情の読み取りに支障をきたす可能性がある。

保育者のなかには、発達障害児や未満児とのコミュニケーションに支障をきたすと感じている者がいた。発達障害児のなかには環境の変化に弱い子どもがいる。そのような子どもは、保育者のマスク着用を「変化」ととらえて嫌がるのが予想された。しかし、発達障害児が保育者のマスク着用を嫌がったというケースは少数であった。乳児についても同様に、保育者のマスク着用を嫌がったケースは少なかった。これらのことから、保育者がマスクを着用した際に生じる発達障害児や未満児とのコミュニケーション上の支障とは、子どもが嫌がるということではなく、保育者の働きかけが子どもに伝わりにくくなることを指していると推察される。ただし、保育者のマスク着用が、発達障害児や未満児とのコミュニケーションにどの程度の影響を及ぼすのか、その影響は他の子どもと比べて大きいのかどうかについて、ここで結論を見いだすことはできない。

## VI. 今後の課題

感染症対策では、マスク着用やうがい、手洗い、

施設内の設備の消毒など、念を入れた対策が必要とされている。一方で、マスク着用が乳幼児とのコミュニケーションや保育に与える影響を無視することはできない。

今後は特に、保育者がマスクで顔を覆うことによって乳幼児との情緒的なやりとりがどの程度の影響を受けるか、保育者の声の届きにくさが保育活動にどう影響するか、保育者の性別によってマスク着用による影響は異なるかなどについて検証を重ね、その結果をふまえてマスク着用のあり方を検討していく必要がある。

## 文 献

- Forgie SE., Reitsma J., Spady D., Wright B. & Stobart K.(2009) The “Fear Factor” for Surgical Masks and Face Shields, as Perceived by Children and Their Parents, *PEDIATRICS*, 124(4), e777-e781.
- 郷田賢・宮本正一（2000）感情判断における顔の部位の効果，*心理学研究*，71(3)，211-218.
- 廣瀬郁美（2014）だてマスクがもたらす心理的作用の検討-ふれあい恐怖心性と移行対象の視点から-，*年報人間関係学*，16，1-13.
- 堀めぐみ・佐々木八重・森脇三重子（2000）ICUに勤務する看護師のマスク常用が患者に及ぼす影響-識別・イメージ・コミュニケーション・情緒の視点から-，*日本看護学会論文集（成人看護I）*，31，92-94.
- Jack RE., Blais C., Scheepers C., Schyns PG. & Caldara R.(2009) Cultural Confusions Show that Facial Expressions Are Not Universal, *Current Biology*, 19, 1543-1548.
- 菊本裕三（2011）『「だてマスク依存症」-無縁社会の入口に立つ人々-』，扶桑社.
- 北島万裕子・加悦美恵・飯野矢住代（2012）マスクを着用した看護師の声は患者にどのような音として聞こえているのか，*日本看護技術学会誌*，11(2)，48-54.
- 厚生労働省（2012）2012年改訂版 保育所における感染症対策ガイドライン，厚生労働省ホームページ，<[www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/pdf/hoiku02.pdf](http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/pdf/hoiku02.pdf)>，（最終閲覧日：2015年7月2日）.
- 森井美代子・飛川真菜・上田香織・吉森祐美・海原

- 真澄・一ノ山隆司(2013) 看護師のマスク装着における実態調査, 日本看護学会論文集, 43, 95-98.
- 野村光江・富城智子・鈴木二三子・吉岡睦美・城戸朗子・吉川佐紀子(2011) 看護師のマスク着用は対応の好ましさを低下させるか?, 電子情報通信学会技術研究報告, 111(214), 1-5.
- 野村光江・富城智子・竹本智子・城由香利・鈴木二三子・方岡愛・富田ひとみ・池田宏子・吉川佐紀子(2009) マスク使用と患者-看護師間コミュニケーション, 電子情報通信学会技術研究報告, 109(27), 29-33.
- 大見広規・鈴木文明・吉川由希子・望月吉勝(2012) 保育所・幼稚園・認定こども園等の施設および保育士, 幼稚園教諭養成校における感染症予防に関する研究, 小児保健研究, 71(1), 92-100.
- 佐々木郁子・萩原恵美(2009) 手術入室時の手術室看護師のマスク着用の印象, 日本看護学会論文集(成人看護I), 40, 27-29.
- 佐藤成美・山内さつき・高林範子・石井裕(2014) 音声分析によるマスク着用時のコミュニケーション方法についての検討, 岡山県立大学保健福祉学部紀要, 21(1), 45-55.
- 田村恵理・岸本桂子・福島紀子(2013) 薬剤師のマスク着用が患者の相談行動心理に及ぼす影響, YAKUGAKU ZASSHI, 133(6), 737-745.

(2015年9月18日受付)

(2015年12月9日受理)